

## 藤田医科大学・前期

試験日 2023年1月19日 時間100分 **数学I** **数学II** **数学III** **数学A** **数学B** (数列, ベクトル)

- 1** (1)  $U = \{x \mid x \text{ は } 2 \text{ 以上 } 28 \text{ 以下の自然数}\}$  を全体集合とする。  $U$  の部分集合  $A = \{x \mid x \text{ は偶数}\}$ ,  $B = \{x \mid x \text{ は } 3 \text{ で割ると } 1 \text{ 余る}\}$ ,  $C = \{x \mid x \text{ と } 2023 \text{ は } 1 \text{ 以外に正の公約数を持たない}\}$  について、次の集合の要素の個数を求めよ。ただし、 $n(X)$  は集合  $X$  の要素の個数を表す。

$$n(A \cap B) = \square, n(\overline{A \cap B}) = \square, n(\overline{A \cap \overline{B}}) = \square, n(\overline{A \cup B}) = \square,$$

$$n(A \cap B \cap C) = \square, n(A \cap B \cap \overline{C}) = \square, n(\overline{A \cup B \cup C}) = \square$$

(2)  $\lim_{x \rightarrow \infty} (x^2 - x\sqrt{x^2 - 5}) = \frac{\square}{\square}$  である。

(3) 曲線  $y = 2x\sqrt{x}$  ( $0 \leq x \leq \frac{5}{3}$ ) の長さは  $\frac{\square}{\square}$  である。

(4)  $(1+i)^n = (1-i)^n$  をみたす 2023 以下の正の整数  $n$  は  $\square$  個ある。ただし、 $i$  は虚数単位である。

(5) 関数  $f(x) = \log |\tan 4x|$  の  $x = \frac{\pi}{48}$  における微分係数は  $\square$  である。

(6)  $\alpha = \sqrt{6+2\sqrt{5}}$  のとき、 $\alpha^5 - \alpha^4 - 12\alpha^3 + 12\alpha^2 + 16\alpha = \square$  である。

(7)  $f(x) = \frac{\sin^3 3x}{\sin^3 3x + \cos^3 3x}$  について、 $\int_0^{\frac{\pi}{6}} \{f(x) - f(\frac{\pi}{6} - x)\} dx = \square$  であるから、

$$\int_0^{\frac{\pi}{6}} f(x) dx = \frac{\pi}{\square} \text{ である。}$$

(8) 3個のサイコロを同時に振るとき、出た目の和が8以下になる確率は  $\frac{\square}{\square}$ 、出た目の積が12以下にな

る確率は  $\frac{\square}{\square}$  である。

(9)  $x$  を実数とする。命題「 $x^2 - 9x + 20 < 0 \implies x^2 - 2(k-1)x + k^2 - 2k - 8 \leq 0$ 」が真となる  $k$  の範囲は  $\square \leq k \leq \square$  である。

(10) 数列  $\{a_k\}$  が  $k \geq 1$  で  $a_k > 0$ ,  $a_k$  の第1項から第  $n$  項までの和  $S_n$  が  $S_n = \frac{1}{2} \left( a_n + \frac{n^3}{a_n} \right)$  であるとき、  
 $S_5 = \square$ ,  $S_{20} = \square$  である。

- 2** 実数  $x$  の区間  $a \leq x \leq b$  (ただし  $0 < a < b$ ) で正の値をとる微分可能な関数  $f(x)$  に対して、微分可能な逆関数  $g(x)$  が存在するとき、定積分  $S_1, S_2$  を次式で定義する。

$$S_1 = \int_a^b f(x) dx$$

$$S_2 = \int_{f(a)}^{f(b)} g(x) dx$$

次の問いに答えよ。

(1)  $S_1 + S_2$  を  $a, b, f(a), f(b)$  で表せ。

(2) 定積分  $\int_3^{99} \sqrt{\sqrt{1+x}-1} dx$  を求めよ。

(3) 定積分  $\int_1^3 \sqrt{\frac{4}{x}-1} dx$  を求めよ。

- 3**  $xy$  平面上の点  $(p, q)$  について、 $p, q$  がともに整数のときこの点を格子点と呼ぶ。また  $e$  を自然対数の底とするとき、 $p-e$  または  $p+e$  のどちらかと、 $q + \frac{1}{2}$  がともに整数のとき、この点を  $e$  点と呼ぶことにする。例えば、 $(p, q) = \left(1-e, \frac{3}{2}\right)$  は  $e$  点である。

次の問いに答えよ。ただし、素数の平方根と  $e$  が無理数であり、

$2.7 < e < 2.8$  であることは証明なしに用いてよい。

- (1) 2つの格子点を結ぶ任意の線分は  $e$  点を通らないことを示せ。  
 (2) 4つの格子点を頂点とし、1辺の長さが1の任意の正方形の内部にある  $e$  点の個数を求めよ。  
 (3) 3つの格子点を頂点とし、1辺が  $x$  軸に平行、1辺が  $y$  軸に平行な任意の直角三角形の面積は、この三角形の内部にある  $e$  点の個数の  $\frac{1}{2}$  に等しいことを示せ。  
 (4) 3つの格子点を頂点とする任意の三角形の面積は、この三角形の内部にある  $e$  点の個数の  $\frac{1}{2}$  に等しいことを示せ。  
 (5) 3つの格子点を頂点とする正三角形は存在しないことを示せ。

### 1 (1) 数学Ⅰ【集合の雑題】標準

▶解答◀  $A = \{2 \cdot 1, 2 \cdot 2, \dots, 2 \cdot 14\}$ ,

$B = \{3 \cdot 1 + 1, 3 \cdot 2 + 1, \dots, 3 \cdot 9 + 1\}$  である。

$2023 = 7 \cdot 17^2$  であるから

$$\overline{C} = \{7, 14, 17, 21, 28\}$$

である。

$$A \cap B = \{4, 10, 16, 22, 28\}$$

より  $n(A \cap B) = 5$  である。

$\overline{A}$  は 2~28 の奇数の集合であるから

$$\overline{A} \cap B = \{7, 13, 19, 25\}$$

より  $n(\overline{A} \cap B) = 4$  である。

$\overline{B}$  は 2~28 の中で、3 で割り切れるか 2 余る集合であるから

$$\overline{A} \cap \overline{B} = \{3, 5, 9, 11, 15, 17, 21, 23, 27\}$$

より  $n(\overline{A} \cap \overline{B}) = 9$  である。

$n(\overline{A \cup B}) = n(\overline{A} \cap \overline{B}) = 9$  である。

$A \cap B$  で  $C$  の要素であるものを考えて

$$A \cap B \cap C = \{4, 10, 16, 22\}$$

より  $n(A \cap B \cap C) = 4$  である。

$$A \cap B \cap \overline{C} = \{28\}$$

より  $n(A \cap B \cap \overline{C}) = 1$  である。

$$\overline{A \cup B \cup C} = \overline{A} \cap \overline{B} \cap \overline{C} = \{17, 21\}$$

より  $n(\overline{A \cup B \cup C}) = 2$  である。

#### 【注意】【計算で見る】

以下文字は正の整数である。 $A \cap B$  の要素を  $x$  とすると

$$x = 2m = 3n + 1$$

とおける。

$$m = \frac{3n+1}{2} = n + \frac{n+1}{2}$$

$\frac{n+1}{2} = k$  とおけて、 $n = 2k - 1$  であるから

$$m = (2k - 1) + k = 3k - 1$$

$$x = 2m = 6k - 2$$

これより  $A \cap B$  の要素は 4 から 6 ずつ増えることが分かる。 $\overline{A} \cap \overline{B}$  についても同様である。

### (2) 数学Ⅲ【関数の極限】基本

▶解答◀  $y = x^2 - x\sqrt{x^2 - 5}$  とおく。

$$y = x(x - \sqrt{x^2 - 5}) = x \cdot \frac{5}{x + \sqrt{x^2 - 5}}$$

$x > 0$  のとき  $y = \frac{5}{1 + \sqrt{1 - \frac{5}{x^2}}}$  であるから

$$\lim_{x \rightarrow \infty} y = \frac{5}{1+1} = \frac{5}{2} \text{ である。}$$

【注意】  $x > 0$  のとき、 $y = x^2 - \sqrt{x^4 - 5x^2}$

$x$  が大きな値のとき、

$$x^4 - 5x^2 = \left(x^2 - \frac{5}{2}\right)^2 - \frac{25}{4} \div \left(x^2 - \frac{5}{2}\right)^2$$

$$y \div x^2 - \left(x^2 - \frac{5}{2}\right) = \frac{5}{2}$$

### (3) 数学Ⅲ【曲線の長さ】標準

▶解答◀  $y = 2x^{\frac{3}{2}}$  のとき  $y' = 3x^{\frac{1}{2}}$

$$\int_0^{\frac{5}{3}} \sqrt{1 + (y')^2} dx = \int_0^{\frac{5}{3}} \sqrt{1 + 9x} dx$$

$$= \left[ \frac{1}{9} \cdot \frac{2}{3} (1 + 9x)^{\frac{3}{2}} \right]_0^{\frac{5}{3}} = \frac{2}{27} \cdot (64 - 1) = \frac{14}{3}$$

### (4) 数学Ⅲ【ド・モアブルの定理】標準

▶解答◀  $(1+i)^n = \left\{ \sqrt{2} \left( \cos \frac{\pi}{4} + i \sin \frac{\pi}{4} \right) \right\}^n$

$$= (\sqrt{2})^n \left( \cos \frac{n\pi}{4} + i \sin \frac{n\pi}{4} \right)$$

$$(1-i)^n = \left\{ \sqrt{2} \left( \cos \left( -\frac{\pi}{4} \right) + i \sin \left( -\frac{\pi}{4} \right) \right) \right\}^n$$

$$= (\sqrt{2})^n \left\{ \cos \left( -\frac{n\pi}{4} \right) + i \sin \left( -\frac{n\pi}{4} \right) \right\}$$

$$= (\sqrt{2})^n \left( \cos \frac{n\pi}{4} - i \sin \frac{n\pi}{4} \right)$$

$(1+i)^n = (1-i)^n$  のとき

$$2(\sqrt{2})^n \sin \frac{n\pi}{4} = 0$$

$k$  を整数として、 $n = 4k$  であるから、 $1 \leq n \leq 2023$  のとき  $\frac{1}{4} \leq k \leq \frac{2023}{4} = 505.75$  より、これを満たす整数  $k$  は 1~505 であるから、 $n$  は 505 個ある。

**【注意】【2乗してみれば】**

$$(1+i)^1 = 1+i \neq (1-i)^1 = 1-i$$

$$(1+i)^2 = 2i \neq (1-i)^2 = -2i$$

$$(1+i)^3 = 2i(1+i) \neq (1-i)^3 = -2i(1-i)$$

$$(1+i)^4 = -4 = (1-i)^4$$

周期4でイコールになる.  $n = 4k$  で, 後は同じである.

**(5) 【数学Ⅲ】【微分係数】【基本】**

**▶解答**  $f(x) = \log |\tan 4x|$  のとき

$$f'(x) = \frac{1}{\tan 4x} \cdot \frac{4}{\cos^2 4x}$$

$$= \frac{4}{\sin 4x \cos 4x} = \frac{8}{\sin 8x}$$

$$f'\left(\frac{\pi}{48}\right) = \frac{8}{\sin \frac{\pi}{6}} = 16$$

**(6) 【数学Ⅱ】【多項式の除法】【標準】**

**▶解答**  $\alpha = \sqrt{6+2\sqrt{5}} = \sqrt{(\sqrt{5}+1)^2} = \sqrt{5}+1$

$\alpha - 1 = \sqrt{5}$  の両辺を2乗して  $\alpha^2 - 2\alpha - 4 = 0$  を得る.  $x^5 - x^4 - 12x^3 + 12x^2 + 16x$  を  $x^2 - 2x - 4$  で割ると商が  $x^3 + x^2 - 6x + 4$ , 余りが16であるから

$$x^5 - x^4 - 12x^3 + 12x^2 + 16x$$

$$= (x^2 - 2x - 4)(x^3 + x^2 - 6x + 4) + 16$$

ここに  $x = \alpha$  を代入すると

$$\alpha^5 - \alpha^4 - 12\alpha^3 + 12\alpha^2 + 16\alpha$$

$$= (\alpha^2 - 2\alpha - 4)(\alpha^3 + \alpha^2 - 6\alpha + 4) + 16 = 16$$

**【注意】【次数下げ】**

$\alpha^2 = 2\alpha + 4$  に  $\alpha$  を掛けて  $\alpha^3 = 2\alpha^2 + 4\alpha$  となる. ここに  $\alpha^2 = 2\alpha + 4$  を代入して

$$\alpha^3 = 2(2\alpha + 4) + 4\alpha = 8\alpha + 8$$

これを繰り返すと  $\alpha^4 = 24\alpha + 32$ ,  $\alpha^5 = 80\alpha + 96$  となる.

$$\alpha^5 - \alpha^4 - 12\alpha^3 + 12\alpha^2 + 16\alpha$$

$$= 80\alpha + 96 - (24\alpha + 32) - 12(8\alpha + 8)$$

$$+ 12(2\alpha + 4) + 16\alpha = 16$$

**(7) 【数学Ⅲ】【定積分】【標準】**

**▶解答**  $I = \int_0^{\frac{\pi}{6}} f(x) dx$ ,

$J = \int_0^{\frac{\pi}{6}} f\left(\frac{\pi}{6} - x\right) dx$  とおく.  $J$  で  $\frac{\pi}{6} - x = t$  とおくと

$$\frac{dt}{dx} = -1$$

$x$	$0 \rightarrow \frac{\pi}{6}$
$t$	$\frac{\pi}{6} \rightarrow 0$

$$J = \int_{\frac{\pi}{6}}^0 f(t) (-dt) = \int_0^{\frac{\pi}{6}} f(x) dx = I$$

1つ目の空欄は  $I - J = 0$

$$f\left(\frac{\pi}{6} - x\right) = \frac{\sin^3\left(\frac{\pi}{2} - 3x\right)}{\sin^3\left(\frac{\pi}{2} - 3x\right) + \cos^3\left(\frac{\pi}{2} - 3x\right)}$$

$$= \frac{\cos^3 3x}{\cos^3 3x + \sin^3 3x}$$

$J = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{\cos^3 3x}{\cos^3 3x + \sin^3 3x} dx$  であるから

$$I + J = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{\cos^3 3x + \sin^3 3x}{\cos^3 3x + \sin^3 3x} dx$$

$$= \int_0^{\frac{\pi}{6}} dx = \frac{\pi}{6}$$

$$I = J = \frac{\pi}{12}$$

**(8) 【数学A】【確率の雑題】【標準】**

**▶解答** 3個のサイコロをA, B, Cとし, それぞれの出る目を  $a, b, c$  とする.  $(a, b, c)$  は  $6^3$  通りある.

$$a + b + c \leq 8$$

$$1 \leq a \leq 6, 1 \leq b \leq 6, 1 \leq c \leq 6$$

のとき

$$d = 8 - (a + b + c) + 1$$

とおくと

$$a + b + c + d = 9, a \geq 1, b \geq 1, c \geq 1, d \geq 1$$

となり, このとき  $a \leq 6, b \leq 6, c \leq 6$  は成り立つ. 9個の○を一列に並べ, ○と○の間(8か所ある)のうちから3か所選んで| (仕切り) を1本ずつ入れ, 1本目の|より左側の○の個数を  $a$ , 1本目と2本目の|の間の○の個数を  $b$ , 2本目と3本目の|の間の○の個数を  $c$ , 3本目の|より右側の○の個数を  $d$  とする. 図は  $(a, b, c, d) = (1, 3, 2, 3)$  のときである.

$$\bigcirc | \bigcirc \bigcirc \bigcirc | \bigcirc \bigcirc | \bigcirc \bigcirc \bigcirc$$

$(a, b, c, d)$  は  ${}_8C_3 = \frac{8 \cdot 7 \cdot 6}{3 \cdot 2 \cdot 1} = 8 \cdot 7$  通りあるから,

$a + b + c \leq 8$  となる確率は

$$\frac{8 \cdot 7}{6^3} = \frac{7}{27}$$

$$abc \leq 12, 1 \leq a \leq 6, 1 \leq b \leq 6, 1 \leq c \leq 6$$

のときを考える.  $ab$  の値は次のようになる.

$\frac{a}{b}$	1	2	3	4	5	6
1	1	2	3	4	5	6
2	2	4	6	8	10	12
3	3	6	9	12	15	18
4	4	8	12	16	20	24
5	5	10	15	20	25	30
6	6	12	18	24	30	36

$c = 1$  のとき  $ab \leq 12$  で, これを満たす  $(a, b)$  は23通りある.

$c = 2$  のとき  $ab \leq 6$  で、これを満たす  $(a, b)$  は 14 通りある。

$c = 3$  のとき  $ab \leq 4$  で、これを満たす  $(a, b)$  は 8 通りある。

$c = 4$  のとき  $ab \leq 3$  で、これを満たす  $(a, b)$  は 5 通りある。

$c = 5$  のとき  $ab \leq 2.4$  で、これを満たす  $(a, b)$  は 3 通りある。

$c = 6$  のとき  $ab \leq 2$  で、これを満たす  $(a, b)$  は 3 通りある。

$abc \leq 12$  となる  $a, b, c$  は  $23 + 14 + 8 + 5 + 3 + 3 = 56$  通りあるから、求める確率は

$$\frac{56}{6^3} = \frac{7}{27}$$

(9) **数学I** 【2次不等式】 **標準**

▶解答◀  $x^2 - 9x + 20 < 0$

$$(x-4)(x-5) < 0$$

$$4 < x < 5$$

$$x^2 - 2(k-1)x + k^2 - 2k - 8 \leq 0$$

$$x^2 - 2(k-1)x + (k-4)(k+2) \leq 0$$

$$\{x - (k-4)\}\{x - (k+2)\} \leq 0$$

$$k-4 \leq x \leq k+2$$



求める条件は  $k-4 \leq 4$  かつ  $k+2 \geq 5$  より  $3 \leq k \leq 8$  である。

(10) **数学B** 【漸化式】 **標準**

▶解答◀  $S_n = \frac{1}{2} \left( a_n + \frac{n^3}{a_n} \right) \dots\dots\dots \textcircled{1}$

で、 $n = 1$  とすると

$$a_1 = \frac{1}{2} \left( a_1 + \frac{1}{a_1} \right)$$

$a_1^2 = 1$  となり  $a_1 > 0$  より  $a_1 = 1$  である。

$n \geq 2$  のとき  $a_n = S_n - S_{n-1}$  であり、これを

$$2S_n = a_n + \frac{n^3}{a_n} \text{ に代入し}$$

$$2S_n = S_n - S_{n-1} + \frac{n^3}{S_n - S_{n-1}}$$

$$S_n + S_{n-1} = \frac{n^3}{S_n - S_{n-1}}$$

$$S_n^2 - S_{n-1}^2 = n^3$$

$k \geq 2$  のとき  $S_k^2 - S_{k-1}^2 = k^3$  を  $k = 2, 3, \dots, n$  とした式について辺ごとに加える。

$$S_n^2 - S_1^2 = \left\{ \frac{1}{2}n(n+1) \right\}^2 - 1^3$$

$$S_1 = 1 \text{ より } S_n^2 = \left\{ \frac{1}{2}n(n+1) \right\}^2 \text{ となり, } S_n > 0 \text{ より}$$

$$S_n = \frac{1}{2}n(n+1) \text{ である.}$$

したがって

$$S_5 = \frac{1}{2} \cdot 5 \cdot 6 = 15, S_{20} = \frac{1}{2} \cdot 20 \cdot 21 = 210$$

$$\begin{aligned} S_n^2 - S_{n-1}^2 &= n^3 \\ S_{n-1}^2 - S_{n-2}^2 &= (n-1)^3 \\ &\vdots \\ S_3^2 - S_2^2 &= 3^3 \\ S_2^2 - S_1^2 &= 2^3 \end{aligned}$$

**注意** 1° 【一般項】

$$n \geq 2 \text{ のとき } a_n = S_n - S_{n-1} = n$$

結果は  $n = 1$  でも成り立つ。よって  $a_n = n$  である。

2° 【元祖】

受験雑誌「大学への数学」第3巻に行われた読者の作問コンクールで、第3位になった鹿野健氏(当時麻生高校3年、後に山形大教授)の問題が

$$S_n = \frac{1}{2} \left( a_n + \frac{1}{a_n} \right), a_n > 0 \text{ である.}$$

$a_n = \sqrt{n} - \sqrt{n-1}$  になる。後に徳島大学などに出題された。 $a_n = S_n - S_{n-1}$  で  $a_n$  を消去するという発想が新傾向のものであった。この元祖では

$$a_n = \sqrt{n} - \sqrt{n-1} \text{ と予想することは難しい.}$$

**別解** ① で  $n = 1$  として

$$a_1 = \frac{1}{2} \left( a_1 + \frac{1}{a_1} \right)$$

$$a_1^2 = 1 \text{ となり } a_1 > 0 \text{ より } a_1 = 1 \text{ である.}$$

① で  $n = 2$  として

$$1 + a_2 = \frac{1}{2} \left( a_2 + \frac{8}{a_2} \right)$$

$$a_2^2 + 2a_2 - 8 = 0$$

$$(a_2 - 2)(a_2 + 4) = 0$$

$$a_2 > 0 \text{ より } a_2 = 2 \text{ である.}$$

① で  $n = 3$  として

$$1 + 2 + a_3 = \frac{1}{2} \left( a_3 + \frac{27}{a_3} \right)$$

$$a_3^2 + 6a_3 - 27 = 0$$

$$(a_3 + 9)(a_3 - 3) = 0$$

$$a_3 > 0 \text{ より } a_3 = 3 \text{ である.}$$

$a_n = n$  であることを数学的帰納法で証明する。

$n = 1$  のとき成り立つ。

$n = 1, 2, \dots, k$  で成り立つとする。

$$a_1 = 1, a_2 = 2, \dots, a_k = k$$

である。このとき

$$S_{k+1} = a_1 + a_2 + \dots + a_k + a_{k+1}$$

$$= (1 + 2 + \dots + k) + a_{k+1} = \frac{1}{2}k(k+1) + a_{k+1}$$

であり、 $S_{k+1} = \frac{1}{2} \left\{ a_{k+1} + \frac{(k+1)^3}{a_{k+1}} \right\}$  であるから

$$\frac{1}{2}k(k+1) + a_{k+1} = \frac{1}{2} \left\{ a_{k+1} + \frac{(k+1)^3}{a_{k+1}} \right\}$$

$$a_{k+1}^2 + k(k+1)a_{k+1} - (k+1)^3 = 0$$

$$\{a_{k+1} - (k+1)\}\{a_{k+1} + (k+1)\} = 0$$

$a_{k+1} > 0$  より  $a_{k+1} = k+1$  である。  $n = k+1$  のとき成り立つから証明された。

したがって、 $S_n = \sum_{k=1}^n k = \frac{1}{2}n(n+1)$  であるから

$$S_5 = \frac{1}{2} \cdot 5 \cdot 6 = 15, S_{20} = \frac{1}{2} \cdot 20 \cdot 21 = 210$$

**注意** 【帰納法の構造】

実験の様子をよく見ると

「 $a_1$  の値を用いて  $a_2$  を求める」

「 $a_1, a_2$  の値を用いて  $a_3$  を求める」

という状態になっている。次は

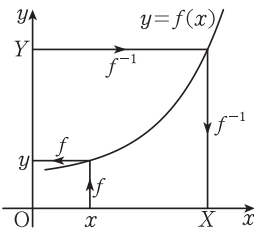
「 $a_1, a_2, a_3$  の値を用いて  $a_4$  を求める」

ことになる。したがって、 $a_1 = 1, \dots, a_k = k$  を仮定して  $a_{k+1} = k+1$  を証明する形の帰納法（人生帰納法という用語はある程度定着している）になるはずだと、理解してほしいが、実際に答案を書かせると「 $n = k$  のとき成り立つとすると」としか、書かない人が多い。あるいは「常に  $a_n = n$  が成り立つとすると、 $S_n = \frac{1}{2} \left( a_n + \frac{n^3}{a_n} \right)$  が成り立つ」という「十分性としての形」の答案を書く人も多い。

**2** **数学Ⅲ** 【定積分】 **標準**

**考え方**

一般に関数  $y = f(x)$  が逆関数をもつということは  $x$  と  $y$  が互いに 1 対 1 対応することである。通常  $f(x)$  の逆関数を  $f^{-1}(x)$  と書く。本問では  $g(x) = f^{-1}(x)$  である。逆関数を求めるとき、 $y = f(x)$  を  $x$  について解いて  $x = f^{-1}(y)$  の形にして、 $x$  と  $y$  を形式的に入れかえて  $y = f^{-1}(x)$  とするよう教科書などでは書いていることが多いが、 $x$  と  $y$  の形式的な入れかえは本来不要である。



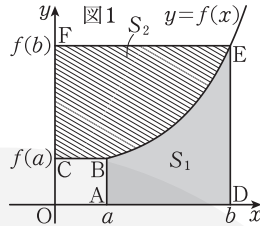
さて本問についてだが、 $f(x)$  が逆関数をもつ微分可能な関数であるから、単調に増加するか、単調に減少す

るかである。さらに

$$S_2 = \int_{f(a)}^{f(b)} g(y) dy$$

と考えると、 $S_1, S_2$  の意味を図形的に理解することができる。計算については別解を見よ。

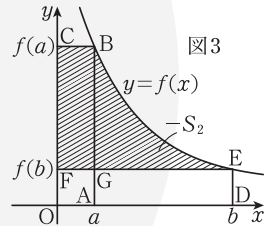
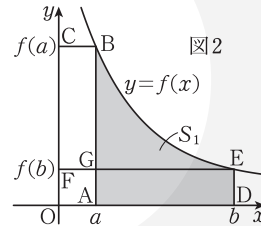
**解答** (1)  $f(x)$  は微分可能で、微分可能な逆関数をもつから、 $f(x)$  は単調に増加（常に増加）するか、単調に減少（常に減少）する。



以下、 $A(a, 0), B(a, f(a)), C(0, f(a)), D(b, 0), E(b, f(b)), F(0, f(b))$  とし、図形  $X$  の面積を  $[X]$  で表す。図 1 を見よ。  $f(x)$  が単調に増加するとき  $S_1 = [ADEB], S_2 = [BEFC]$  で

$$S_1 + S_2 = [ODEF] - [OABC] = bf(b) - af(a)$$

である。



$G(a, f(b))$  とする。図 2 を見よ。  $S_1 = [ADEB]$  である。また  $f(a) > f(b)$  であるから

$$\int_{f(b)}^{f(a)} g(y) dy = - \int_{f(a)}^{f(b)} g(x) dx = -S_2$$

となり、 $-S_2 = [BCFE]$  である。

$$S_1 + S_2 = [ADEG] - [BCFG] = [ODEF] - [OABC] = bf(b) - af(a)$$

である。

以上より  $S_1 + S_2 = bf(b) - af(a)$  である。

(2)  $f(x) = \sqrt{\sqrt{1+x}-1}$  のとき  $f(3) = 1, f(99) = 3$  である。  $y = \sqrt{\sqrt{1+x}-1}$  とすると

$$y^2 = \sqrt{1+x}-1$$

$$1+x = (y^2+1)^2$$

$$x = y^4 + 2y^2$$

であるから、 $g(y) = y^4 + 2y^2$  である。

$$S_1 = \int_3^{99} f(x) dx, S_2 = \int_1^3 g(y) dy$$

$$S_2 = \int_1^3 (y^4 + 2y^2) dy = \left[ \frac{y^5}{5} + \frac{2y^3}{3} \right]_1^3$$

$$= \left( \frac{243}{5} + 18 \right) - \left( \frac{1}{5} + \frac{2}{3} \right) = \frac{986}{15}$$

$$S_1 = 99f(99) - 3f(3) - S_2$$

$$= 99 \cdot 3 - 3 \cdot 1 - \frac{986}{15} = \frac{3424}{15}$$

(3)  $f(x) = \sqrt{\frac{4}{x} - 1}$  のとき  $f(1) = \sqrt{3}$ ,

$f(3) = \frac{1}{\sqrt{3}}$  である.  $y = \sqrt{\frac{4}{x} - 1}$  とすると

$y^2 = \frac{4}{x} - 1$  であり,  $x = \frac{4}{y^2 + 1}$  だから  $g(y) = \frac{4}{y^2 + 1}$

$$S_1 = \int_1^3 f(x) dx, S_2 = \int_{\sqrt{3}}^{\frac{1}{\sqrt{3}}} g(y) dy$$

である.  $y = \tan \theta$  とおくと  $\frac{dy}{d\theta} = \frac{1}{\cos^2 \theta}$

$y$	$\sqrt{3} \rightarrow \frac{1}{\sqrt{3}}$
$\theta$	$\frac{\pi}{3} \rightarrow \frac{\pi}{6}$

$$S_2 = \int_{\frac{\pi}{3}}^{\frac{\pi}{6}} \frac{4}{\tan^2 \theta + 1} \cdot \frac{1}{\cos^2 \theta} d\theta$$

$$= \int_{\frac{\pi}{3}}^{\frac{\pi}{6}} 4 d\theta = \left[ 4\theta \right]_{\frac{\pi}{3}}^{\frac{\pi}{6}} = \frac{2\pi}{3} - \frac{4\pi}{3} = -\frac{2\pi}{3}$$

$$S_1 = 3f(3) - 1 \cdot f(1) - S_2$$

$$= \sqrt{3} - \sqrt{3} - \left( -\frac{2\pi}{3} \right) = \frac{2\pi}{3}$$

◆別解◆ (1)  $x = g(y)$  のとき  $y = f(x)$

$$\frac{dy}{dx} = f'(x)$$

$y$	$f(a) \rightarrow f(b)$
$x$	$a \rightarrow b$

$$\int_{f(a)}^{f(b)} g(y) dy = \int_a^b x \frac{dy}{dx} dx$$

$$= \int_a^b x f'(x) dx$$

$$= \left[ x f(x) \right]_a^b - \int_a^b (x)' f(x) dx$$

$$= b f(b) - a f(a) - \int_a^b f(x) dx$$

$$S_2 = b f(b) - a f(a) - S_1$$

$$S_1 + S_2 = b f(b) - a f(a)$$

(3)  $x = 4 \cos^2 \theta$  とおくと

$$\frac{dx}{d\theta} = -8 \cos \theta \sin \theta$$

$x$	$1 \rightarrow 3$
$\theta$	$\frac{\pi}{3} \rightarrow \frac{\pi}{6}$

$$\int_1^3 \sqrt{\frac{4}{x} - 1} dx$$

$$= \int_{\frac{\pi}{3}}^{\frac{\pi}{6}} \sqrt{\frac{1}{\cos^2 \theta} - 1} \cdot (-8 \cos \theta \sin \theta) d\theta$$

$$= 8 \int_{\frac{\pi}{3}}^{\frac{\pi}{6}} \sqrt{\tan^2 \theta} \cos \theta \sin \theta d\theta$$

$$= 8 \int_{\frac{\pi}{3}}^{\frac{\pi}{6}} \sin^2 \theta d\theta = 4 \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{3}} (1 - \cos 2\theta) d\theta$$

$$= 4 \left[ \theta - \frac{\sin 2\theta}{2} \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{3}} = \frac{2\pi}{3}$$

### 3 数学A 【整数の雑題】 や 難

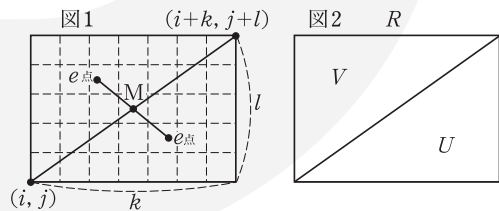
#### ▶解答◀

(1) 問題文の  $e$  点の説明が回りくどい。「 $p-e$  または  $p+e$  のどちらかと、 $q + \frac{1}{2}$  がともに整数」と、「整数」に結びつけているが、整数に着させる意味が分からない。「例えば」を見れば、「任意の整数  $m, n$  に対して  $(m-e, n + \frac{1}{2})$ ,  $(m+e, n + \frac{1}{2})$  の形のもを  $e$  点と呼ぶ」でよいのではないのか?そして、このとき  $m-e$  または  $m+e$  を  $r$  とおき、 $n + \frac{1}{2}$  を  $s$  とおく.  $r$  は無理数,  $s$  は整数でない有理数である.

2つの異なる格子点  $A(a, b), B(c, d)$  を結ぶ線分で、 $e$  点  $R(r, s)$  を通るものと仮定する.  $a, b, c, d$  は整数である.  $r \neq a$  であるから  $AR$  は  $x$  軸に垂直でなく,  $AR, AB$  の傾きを比べて  $\frac{s-b}{r-a} = \frac{d-b}{c-a}$  となる.  $s-b \neq 0$  であるから  $d-b \neq 0$  である.

$$r-a = \frac{(c-a)(s-b)}{d-b}$$

となり, 左辺は無理数, 右辺は有理数で矛盾する. よって証明された.

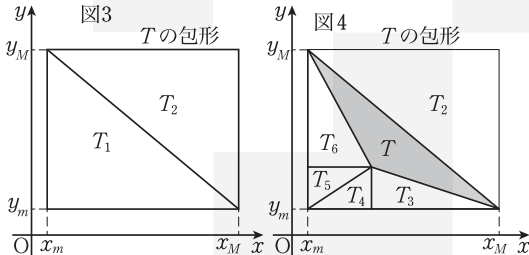


(2)  $m, n$  は任意の整数とする.  $2.7 < e < 2.8$  だから正方形  $0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1$  内の  $e$  点は  $(e-2, \frac{1}{2})$ ,  $(3-e, \frac{1}{2})$  の2個だけあり, 正方形  $m \leq x \leq m+1, n \leq y \leq n+1$  内の  $e$  点は  $(m+e-2, n + \frac{1}{2})$ ,  $(m+3-e, n + \frac{1}{2})$  の2個.

(3) 三角形  $T$  に対し, その面積を  $S(T)$  とし,  $T$  の内部にある  $e$  点の個数を  $E(T)$  で表すことにする. さらに, 「4つの格子点を頂点とし, 1辺の長さが1の任意の正方形」を単位正方形と呼ぶことにする.  $i, j$  を整数,  $k, l$  を自然数とする. 長方形  $R: i \leq x \leq i+k, j \leq y \leq j+l$  の中心  $(i + \frac{k}{2}, j + \frac{l}{2})$  を  $M$  とする.  $R$  には単位正

形が  $kl$  個ある。  $R$  の面積は  $kl$  である。  $R$  の内部には  $2kl$  個の  $e$  点があり、  $R$  の周や対角線上には  $e$  点はなく、  $R$  の内部にある  $e$  点の  $M$  に関する対称点は  $R$  の内部の  $e$  点である。  $R$  を対角線で二分した直角三角形の一方を  $U$ 、他方を  $V$  とする。  $U, V$  の周上には  $e$  点はなく、  $U$  の内部にある  $e$  点と  $V$  の内部にある  $e$  点は、  $kl$  個ずつある。  $E(U) = kl, S(U) = \frac{1}{2}kl = \frac{1}{2}E(U)$  であるから証明された。

(4) 図3, 4を見よ。 格子点を頂点とする任意の三角形を  $T$  とする。  $T$  の3頂点の  $x$  座標の最小値を  $x_m$ 、最大値を  $x_M$ 、  $y$  座標の最小値を  $y_m$ 、最大値を  $y_M$  とする。 4点  $(x_m, y_m), (x_M, y_m), (x_M, y_M), (x_m, y_M)$  を頂点とする長方形を  $T$  の(以下  $T$  のを省略する)包形と呼ぶことにする。 以下、  $T_1, T_2, T_3, T_4, T_5, T_6$  はすべて、(3)に出てくる、1辺が  $x$  軸に平行、1辺が  $y$  軸に平行な直角三角形である。  $T$  の包形はその対角線で2つの直角三角形  $T_1, T_2$  に分けることができる。



そして「包形からいくつかの直角三角形を除いたものが  $T$ 」と捉えることができる。

$x_m, x_M, y_m, y_M$  で4つの値があるが、  $T$  の頂点の中に、このどれも持たないものがあるときは図4のように、その頂点から包形の辺に下ろした2本の垂線 ( $T$  の内部を通らないもの) と包形の2辺で長方形をなし、さらにその長方形を2分割 ( $T_4$  と  $T_5$ ) して包形から5つの直角三角形  $T_2, \dots, T_6$  を除いた形になる。きちんと書くと結構鬱陶しい。 以下は図を見ていただきたい。

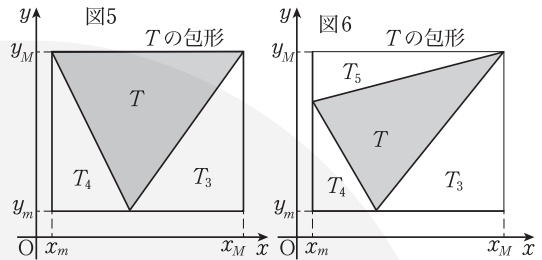
$$\begin{aligned}
 S(T) &= S(T_1) - S(T_3) - S(T_4) - S(T_5) - S(T_6) \\
 &= \frac{1}{2}E(T_1) - \frac{1}{2}E(T_3) - \frac{1}{2}E(T_4) \\
 &\quad - \frac{1}{2}E(T_5) - \frac{1}{2}E(T_6) = \frac{1}{2}E(T)
 \end{aligned}$$

$T$  が(3)に出てくる直角三角形の場合もあるが、これは省略する。 図5のように  $T$  が、包形から2つの直角三角形  $T_3, T_4$  を除く形のとときには

$$\begin{aligned}
 S(T) &= S(T_1) + S(T_2) - S(T_3) - S(T_4) \\
 &= \frac{1}{2}E(T_1) + \frac{1}{2}E(T_2) - \frac{1}{2}E(T_3) - \frac{1}{2}E(T_4) \\
 &= \frac{1}{2}E(T)
 \end{aligned}$$

包形から3つの直角三角形を除く場合(図6)でも同様である。

(5) これは有名問題であり、  $e$  点など使わない方法が知られている。 3頂点を格子点にもつ正三角形  $ABC$  が存在すると仮定する。  $\overrightarrow{AB} = (a, b), \overrightarrow{AC} = (c, d)$  とおく。  $\overrightarrow{AB}$  は格子点  $A, B$  の成分同士の差であるから、  $a, b$  は整数になる。 同じく  $c, d$  も整数である。 三角形  $ABC$  の面積  $\triangle ABC = \frac{1}{2}|ad - bc|$  は有理数であり、一方  $\triangle ABC = \frac{\sqrt{3}}{4}AB^2 = \frac{\sqrt{3}}{4}(a^2 + b^2)$  は無理数であるから矛盾する。 よって証明された。



**【注意】 1°【出題者の意図に従えば】**

(5) では次のようにすると  $\frac{1}{2}|ad - bc|$  を使わなくても証明できる。

3頂点が格子点の三角形の面積は、包形の面積(整数)から、いくつかの直角三角形の面積を引いたものであるから、面積は有理数である。 また、一辺の長さの2乗は  $x$  成分の差の2乗と  $y$  成分の差の2乗の和であるから整数である。 とところが、正三角形  $ABC$  の面積  $\triangle ABC = \frac{\sqrt{3}}{4}AB^2$  は無理数であるから矛盾する。

**2°【交角に着目すると】**

3頂点が格子点の三角形  $ABC$  の辺の中には  $x$  軸に垂直でない2辺があるから、それを  $AB, AC$  とする。 左まわりに  $A, B, C$  の順であるとする。

$\overrightarrow{AB} = (a, b), \overrightarrow{AC} = (c, d)$  とおく。  $a, b, c, d$  は整数であり、  $a, c$  は0でない。  $AB, AC$  の傾きを  $m_1, m_2$  とする。

$$\tan \angle BAC = \frac{m_2 - m_1}{1 + m_1 m_2} = \frac{\frac{d}{c} - \frac{b}{a}}{1 + \frac{b}{a} \cdot \frac{d}{c}}$$

は有理数である。  $\tan 60^\circ = \sqrt{3}$  であるから、  $\angle BAC$  が60度になることはない。

**【要の分析】** 例年通り標準的な問題が多いが、**3**

は見た目に圧倒されて、試験場では敬遠した人も多いだろう。 特に(4)は難しい。

(荻原、楊、遠藤、安田亨)